

絵画専攻修了論文題目一覧

|        |   |
|--------|---|
| 日本画領域  |   |
| 漆崎 正樹  | 自身の制作について　これまでとこれから   |
| 折笠 敬昭  | 芸術における存在の不確かさについて   |
| 黒木 美都子 | 不可視の領域の先に、不滅の美は存在するのか   |
| 黒田 花菜子 | 求められる支持体とその可能性  |
| 坂田 恭平  | 「認識における絵画反応」<br>―イメージによる化合と還元―                                |
| 杉岡 みなみ | 表象空間と距離   |
| 手網 笹乃  | 饒舌な器官『手』について  |
| 松原 麻衣  | 絵画における色彩の存在   |
| 山嵯 雷蔵  | 日本画技法に最適な石膏下地の研究  |
| 油画領域   |   |
| 今井 由紀  | キャラクターと自己   |
| 大橋 麻里子 | 絵画を探る   |
| 岡田 菜美  | 空間と人における意識の関係   |
| 北川 香乃花 | 女性画家の自画像と私の作品   |
| 來山 侑加  | 今、自分について考える   |
| 君島 李佳  | 作用し合う絵の中  |
| 黒澤 優   | クリエイティブについて   |
| 小林 奈央実 | Imaginary friend―心の中の不思議な対話―                                  |
| 鈴木 亮平  | フェティッシュの具現  |
| 関谷 はつみ | 絵画の解体から拡張へ―絵画の問題と制作について―                                      |
| 田中 明日香 | 風景の知覚<br>―発見された風景と、表現される風景画のこれから―                             |
| 田中 悠紀  | 絵を通してストレスと向き合う  |
| 長 恵利佳  | 作者が作品について語ること   |
| 富江 亮   | 先駆者たちの佇まい<br>―ヒップホップミュージックとダダイズムにみる相似と差異、21世紀へと受け継がれるステートメント― |
| 中島 瑠里  | 絵と人をつなぐ「親しみ」のちから  |
| 中村 蒔人  | EyalGeverと今日の仮想現実   |
| 新山 碧   | 絵画によるイメージの実現の試み   |
| 二反田 彩  | 形成を定めない美術   |
| 新タ 莉江  | 他者から見る自己の存在感  |
| 長谷川 彩織 | 絵画の探求―「今」はどこにあるのか―  |
| 馬場 美桜子 | ある死生観から生まれる絵画   |

|       |                                       |
|-------|---------------------------------------|
| 韓 廷旻  | インスタレーションを通した時間の流れと自然表現研究<br>：本人作品中心に |
| 松浦 実央 | ニューペインティングからの展望<br>―創造行為の普遍的な意義―      |
| 松下 賢太 | 行為のマンダラ                               |
| 松村 優花 | 活力を与える作品<br>―作品制作と心を動かす絵画について―        |
| 村井 優香 | 子どもの絵を持つ魅力（自身の作品との関連性）                |
| 吉田 麻未 | 制作における個人史                             |
| 渡部 未乃 | 風景を構成する要素について                         |
| 浅野 拓也 | 構造主義としての美術                            |

|        |                                      |
|--------|--------------------------------------|
| 版画領域   |                                      |
| 大島 瑠璃子 | 水と表現について                             |
| 梶谷 令   | 展示空間における作品の行方―ハイデッガー的作品存在解釈をてがかりとして― |
| 金井塚 睦  | 髪は生きている―様々な場面で見る髪と感情の関係―             |
| 上村 美帆  | 絵画作品における線について                        |
| 霧生 まどか | 移ろいゆくものと永遠の時間の狭間                     |
| 崔 恩知   | 幸福のコスモロジー                            |
| 内藤 安純  | 私の幸福論―あるいは画面構成の秩序に関する研究―             |
| 野崎 優里  | フェティシズムとエロティシズムを描く                   |
| 濱松 靖葉  | 何故異世界を描くのか（ファンタジーへの憧れ）               |
| 淵脇 真理子 | 虚と実の狭間で                              |

彫刻専攻

Sculpture Course

## 遠藤 良亮

ENDO, Ryosuke

### 素材の研究

Research of materials



Vision test / ミクストメディア / Mixed media / 53 × 53 × 53 cm



「Vision test」は鏡、マジックミラーなど初めての素材を使い制作した。馬に描かれた蹄が視力検査のランドルト環を表し、合わせ鏡により無限に広がって見える。

「Paradise of life」はシュレッダーによって裁断された紙を素材に制作した。この素材は情報漏洩を防ぐため再利用せず、焼却処分されるものだ。モチーフは「ブレーメンの音楽隊」。年を取り、仕事をこなせず、人間に不要とされた動物たちが登場する。現代の使い捨て社会に問いかける作品として制作した。



Paradise of life  
シュレッダーで裁断された紙 / Paper cut with a paper shredder  
280 × 200 × 80 cm

## 空閑 渉

KUGA, Sho

### 美術鑄造の展開

Deployment of art casting



#### Appearance

鑄込んだアルミニウム、毛糸

Casted aluminum, acrylic yarn

サイズ可変

Variable size

鑄造技法とは金属を熔解し、原型から型取りした鑄型に金属を鑄込み固める古くから伝わる技法。最初に鑄造を見た時、金属を熔解し熱を帯びながら流動して冷えて固まる様子は、宛ら生命の一生を見ている様な気持ちになったのを覚えている。これに興味を持ったのは高校生の頃で、大学から研究を始めました。

修了制作では、毛糸をかぎ針編みしたものを蝋型鑄造によりアルミニウムにし、それと再び毛糸を編み合わせるという

技法で制作しました。本来鑄造では、原型を忠実に金属に置き換える事が重要になるのだが、原型を柔らかく変形する毛糸の編み物にする事により、鑄型にして固まるまでどのような形になるか分からない鑄造の別の面を表しました。

原型を金属に置き換えるのではなく、原型というイメージを鑄型をかえし金属の塊に出現させる作品制作の新たなアプローチになるのではないかと考えている。様々なアプローチを試みることで鑄造や自身の制作の展開を目標にしている。



作品細部 / Detail

## 竹中 優香

TAKENAKA, Yuka

### 人は他者といかに関わるのか

How can a person associate with others?



Uni\_00, 01, 03, 07, 10, 11, 13, 15, 16

スポンジ、テグス

Sponge and fishing line

200 × 100 × 20 cm



出会った人に声をかけ握手をしてもらう。その手と手の間にできる空間を型取った “That was already lost”。同じ条件のもと、何人かの人にやぶいてもらったスポンジを自身で縫い合わせた “uni”。

私は自身や他者の「行為」を直接的に制作に取り込み、「行為」そのものを作品にすることを試みる。鑑賞者は作品を通して他者との関係を考察することとなる。



That was already lost

石膏、ラベル

Plaster, label

10 × 20 × 15 cm (撮影：加藤健)

# 西村 卓

NISHIMURA, Taku

## 「人と人の精神的触れ合いと それに伴う相互の感覚や感情と行動や言動とのズレ」についての考察

Consideration of the mental connection between people and the gap between senses and actions



Re:  
木、インク、樹脂、家具、ワイヤー、グリッター、ボルト  
Wood, ink, resin, furniture, wire, glitter and bolts  
サイズ可変  
Variable size

私は「人と人の精神的触れ合いとそれに伴う相互の感覚や感情と行動や言動とのズレ」について考察し、ドローイング的に制作してきた。「ブロック状に製材した木材を8色に着色し集合させていく」という手法を主軸として、立体作品と平面作品を並行して制作する。今回の作品はそれらの作品群の集大成となる作品であり、私の新たな一歩である。

「人と人の精神的触れ合いとそれに伴う相互の感覚や感情と行動や言動とのズレ」とは、社会的集団や人間関係における「自身の感情や感覚」と「自身の行動や言動」のズレのことである。

例えば、私の友人（便宜的にAとする。）と私の嫌いな人間（便宜的にBとする。）が友人関係にあるとする。私とAとBが共にひとつの場に居合わせた場合、場の雰囲気悪くすることを避け、私はBに対してその場を取り繕うような言動や行動をしてしまうだろう。また、とても親族や恋人など非常に親

しい間柄にある人間が私のために手料理を振る舞ってくれるような状況にあった場合、料理の「美味しい」「不味い」に関わらず相手に対して「美味しい」と言ってしまうことはないだろうか。私はこうした行動や言動にたいして、強い違和感を感じている。それは個々の闘争であり、思考と思考の邂逅である。そして彼らは常に許容と拒絶を繰り返す。

修了作品では、今まで扱ってこなかった素材（グリーンアーミーメン、プラレール、合成樹脂塗料など）を積極的に取り入れた。玩具を作品の中に取り入れることで、作品の中に人らしき存在を出現させたのだ。

鑑賞者が作品と同じ場所に存在しながらも、作品の中に人らしき存在を発見することでテレビゲームみたいに別の世界へ入り込んだような感覚になることを期待している。

作品の中に鑑賞者が入り込むことで私の思考は他者の思考と邂逅するのではないだろうか。



部分

Century Color —こんな大きな世界で僕は出会った—  
Century Color —The world is too big, but we are able to meet you—  
木、インク、樹脂、合成樹脂塗料、グリーンアーミーメン、プラレール、ボルト  
Wood, ink, resin, synthetic resin paint, green soldiers, plastic rail and bolt  
300 × 430 × 220 cm

## 橋本 康平

HASHIMOTO, Kohei

### 衝動の過程と結果についての研究

A study of the processes and results of impulse



それではない  
That's not it  
樟、網  
Camphor and net  
80 × 130 × 140 cm (撮影者：小松稔)



かけたもの  
Hang from the ceiling  
樟、ワイヤー  
Camphor tree and wire  
350 × 150 × 150 cm

衝動によって切り出された形を、全体を構成するための一部分としての「パーツ」という認識ではなく、「コンポーネント」という全体を構成する上での独立した一部分と捉える。私の制作活動における部品の存在は、一つの形として創り出された個である。一つの作品を構成する要素となりな

がらも単体として必要とするものではなく存在することから、パーツではなくコンポーネントであるといえる。

そのコンポーネントを一時の力により組み上げることで偶然性を内包した多様な意味を知覚できる形体となり、その形体に内包された衝動は鑑賞者の知覚に因るものとなる。

古瀬 美菜

FURUSE, Mina

自身が作品制作時に意識する場所についての研究

Research on the awareness of place during the production of works

私は今まで記憶や思い出をかたちに置き換えることを起点に作品制作を行ってきた。記憶や思い出を想うことで、現在という位置から過去を望み対面することができる。そして、記憶や思い出を想う私の立場とは、何かの際や畔に佇んで遠くの景色を望んでいることに例えられる。私は作品を制作することで、この際や畔のような場所を築き、その場所が作品を見る人にとっても何かに対面できる場所として在らしめたい。



イズクニカ (イマ)  
Wither : the present  
合板、鉄、焼成粘土、塩ビパイプ、滑り止めテープ  
Plywood, iorn, fired clay, polyvinyl chloride pipe and antislipping tape  
31 × 273 × 103 cm



イズクニカ (クモ)  
Wither : cloud  
合板、鉄、綿、染めた風紐、砂利  
Plywood, iorn, cotton, dyed kite string and gravel  
40 × 320 × 320 cm

## 三上 真稔

MIKAMI, Masatoshi

### 境界性の表出

作為と無作為

Expression of borderlines

Unintentionality with artificiality

切断を主とした制作過程による、石材が内包する時間的空間的境界性を形状として表出させることを意図として、制作を進めた。これにおいてわたしが最も重要視する点は、作品名「愚神」にある、愚という文字にある。論理と抽象を持ち合わせる上で、その両立は難しく、感覚的な裁量により左右されてしまう。その都度に統合されていない、絶えず変化する回答は、人間の柔軟性であり同時に未発達な愚行であると、表することに由来する。

「landscape」においては、限定的な空間の中で模索する、切断における作為と無作為の境界性について追求した。これにおける境界性とは、「開拓」されている環境と「未開拓」である自然との境界性を主体としている。どちらも、人間主観であるという観点からも問うべき点がある。



Landscape

花崗岩

Granite

70 × 170 × 200 cm



愚神 / Piece of folly

花崗岩 / Granite / 1450 × 460 × 330 cm (撮影者：小松稔)

## 山口 恵梨子

YAMAGUCHI, Eriko

### 彫刻と時間

Sculpture and time

人に対して何かを伝えるために制作しているというよりは、今の自分と向き合い内面性を結晶化させることを心にかけている。不変的である彫刻という存在に対し、流動的・不可逆的な時間という要素をどう組み込んでいくかに苦心しながらも、私自身の「今」を織り込むことを念頭に入れている。「人生の記録」としての表現を志しているからだ。何のために表現をするのかとは人それぞれが持ち得るテーマであるし、

時代によりその意味合いは変わるものかもしれない。しかし、私はやはり、誰かのために表現するというよりは、自分が望んで表現をしたいという衝動ありきで作品は生まれていくのだと考える。だからこそ、「なぜ制作をするのか。」と人に問われたら、「わたしの人生の記録のためだ。」と答えたい。制作を重ねることで、時代時代に作った作品群が「かたちを持った人生」になることを理想としながら。



**Cocoon**  
人工毛、ボンド  
Synthetic hair and glue  
50 × 450 × 50 cm (撮影者：小松稔)



**Praying**  
麻、布 / Hemp and cloth / 280 × 280 × 10 cm

和賀 碧

WAGA, Midori

自作品に関する考察

A study of my work - The Boundary between public and private -

私の作品は内と外、あるいは公と私を分け隔てる境界を象徴するものがモチーフとなっている。窓やカーテン、衣服のドレープといったそれ自体では自立しないものや存在理由のないものを大理石という素材を使い強固なものに置き換えることで境界の存在を強く意識させる作品を試みてきた。

下記の作品「カリアティード」は公と私、身体を隠すことをテーマに神殿遺跡における柱、女像柱にみられる身体を覆い隠す衣服の襞、そしてセルによって構成されるインスタレーションである。



カリアティード  
Caryatid  
大理石、合板  
Marble and plywood  
サイズ可変  
Variable size



カリアティード(部分)  
Caryatid (detail)  
(撮影者：水上嘉久)